HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	準実在論者はハイブリッド表出主義を採用すべきか
Author(s)	小林, 知恵
Citation	研究論集, 19, 35 (左)-49 (左)
Issue Date	2019-12-20
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.19.l35
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79792
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_rjgshhs_19_p035-050_L.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.19.l 35

準実在論者はハイブリッド表出主義を採用すべきか

小　林　知　恵

要　旨

S. ブラックバーンの準実在論は，態度の投影という考えを経由することによって，道徳的性質や道徳的事実の存在を前提とすることなく，私たちの道徳的実践を説明することを目指すプログラムである。彼は道徳的言語実践の説明に際して，道徳的言明の意味論的機能は態度の表出であるとする表出主義を採用する。しかし，表出主義の妥当性は長らく現代メタ倫理学上の一大トピックとして盛んに論じられ続けており，近年では表出主義の難点を解消する代替案として様々なタイプのハイブリッド表出主義が提唱されている。本稿では，ブラックバーンの純粋な表出主義と M. リッジが提唱したハイブリッド表出主義の相違点を明らかにし，ブラックバーン流の表出主義がハイブリッド表出主義に取って代わられるべきではない理由を，彼の理論内部の整合性という観点と，ハイブリッド表出主義自体が抱える難点に基づいて提示する。

序

S. ブラックバーンの準実在論は，私たちの態度の投影という考えを経由することによって，道徳的性質や道徳的事実の存在を前提とすることなく，私たちの道徳的実践を説明することを目指す。彼のアプローチは，私たちの道徳的思考の機能に着目して，その一連のプロセスに関する説明を与えるというものであり，道徳的思考の生成過程については投影説（projectivism）を，また道徳的言明の意味論については表出主義（expressivism）を採用する。道徳的判断が持つ主要な機能をあくまで判断主体の態度や感情，欲求などの表出だと考える立場である表出主義の妥当性は，長らく現代メタ倫理学上の一大トピックとして盛んに論じられ続けており，ブラックバーン自身も表出主義に向けられた批判に応答する形で理論の洗練をはかってきた。

本稿では，ブラックバーンの表出主義と近年注目を集めているハイブリッド表出主義の関係

について論じる。ハイブリッド表出主義は表出主義の難点を解消する代替案として提示されたが，管見の及ぶ限り，ブラックバーン自身はこの新たな立場に対して直接的な言及を加えていない。そこで，彼の表出主義の基盤となる主張を検討するとともに，ハイブリッド表出主義に寄せられる様々な批判を手がかりにして，彼の準実在論の意味論的要素の改定策としてハイブリッド表出主義が相応しいものかどうかを明らかにする。

本稿の議論は以下のように進められる。第 1 節と第 2 節ではブラックバーンの投影説と表出主義を概観し，特に推論規則の適用に関する批判（フレーゲ・ギーチ問題）への応答に着目して，彼がどのように自身の理論の洗練をはかってきたのかを跡づける。第 3 節では，表出主義の利点を保持しながら批判をかわす立場として新たに提示されたハイブリッド表出主義を概観し，両者の相違点を明らかにする。そして第 4 節と第 5 節で，ブラックバーン流の表出主義がハイブリッド表出主義に取って代わられるべきではない理由を，彼の理論内部の整合性という観点と，ハイブリッド表出主義そのものが抱える難点に基づいて提示する。

1　投影説

本節では道徳的思考の生成過程に関するブラックバーンの見解を跡づける。

どのようにして道徳的思考は生成されるのかという問題に応答するにあたって，彼が出発点とするのは，私たちは世界を多様な仕方で表象し，それに従って様々な仕方で振る舞うという事実である。人間の内で生じるこの一連のプロセスは，特定の入力を取り込み，特定の出力を吐き出すようなデバイスになぞらえて説明される（EQ: 208, RP: 5）。ここで言われている入力としての表象内容とは，特定の性質を持つ行為・状況・性格特性などである。たとえば，無辜の人に暴力を振るうという行為，暴行された人がうめき声をあげているという状況，ある人が粗暴な性格であることが挙げられる。ただし，その内容はあくまでも価値的内容を含まない純粋に記述的なものに限定される。他方，出力としての振る舞いとは人が抱く態度のことであり，特定の政策・選択・行為に対する是認や否認といったものが含まれる。

では，どのようにして入力としての表象内容は特定の態度へと変じるのか。ブラックバーンによれば，各人の表象内容をその人の反応や態度へと変換するのは，その人の感受性（sensitivity）である。言いかえれば，ブラックバーンの理論においては，私たちひとりひとりがもつ感受性こそが，出力として生じる道徳的思考の内容を決定づける。同じ入力があっても人によって出力として現れる態度が異なるのは，まさにこの感受性の作用の違いによるのである。善い人はある特性や状況を，特定の反応が要求されているものとして選び出し，他のものを重要ではないものとして無視することを習得している，とされる（RP: 5）。

しかし，ブラックバーンの想定とは反対に，私たちの実感として，表象内容には記述的なものだけではなく行為や状況が持つ道徳的な特徴も含まれるのではないか，と思われるかもしれ

ない。このような疑念への応答として，彼は「道徳的特徴を構築物として，または私の呼び方に従えば，投影として理解する」(EQ: 208) という方針を打ち出す。すなわち，道徳的事実や道徳的性質が存在することを認め，それらが表象内容に含まれると考える道徳実在論に代わる説明として投影説（projectivism）を提示する。

> 投影説によれば，私たちの感情（sentiments）や他の反応は事物の自然的特徴によって引き起こされる。そして，アイスクリームの美味しさが私たちに与える幸福にかなう（answers）のと同じ仕方で，あたかも世界が私たちの感情にかなう特徴を含んでいるかのように，私たちは世界に「金メッキを塗るかあるいは汚したりする（glid or stain）」のである。(EQ: 152)

投影説の中心的な主張は，私たちは実在しない道徳的性質を事物に投影することによって，あたかも道徳的判断に対応する道徳的性質が実在するかのように語っている，というものである[1]。「犬を蹴ることは悪い」という道徳的思考の生成過程を例に考えてみよう。私たちは感覚器官を通じて表象内容（人間が犬を蹴っている，蹴られた犬がうめき声をあげて顔をしかめている，犬を蹴った人が笑みを浮かべている等）を獲得し，犬が感じている苦しみや犬を蹴った人の意図に関する信念を推論を通じて形成し，この信念と私たちの感受性によって行為への憤りや犬への憐れみといった感情が引き起こされるだろう。こうした感情は私たちをして「犬を蹴ることは悪い」という道徳的判断に至らしめる。しかし投影説によれば，ただ単に私たちは，当該の道徳的判断を自身が世界の中で経験した対象（上述の出来事）へと投影し，あたかも対象（犬を蹴ること）が判断に対応する道徳的性質（悪さ）を備えているかのように語っているにすぎない[2]。

この投影というアイディアは決して新しいものではなく，少なくとも D. ヒュームの道徳哲学にまで遡ることができる。ブラックバーンは特に *An enquiry concerning the principles of*

---

[1] 投影説の亜種である修正主義的投影説（revisionist projectivism）によれば，実在論に汚染された道徳的言語や概念は修正されるべきである。ブラックバーンはこの立場を，マッキーが *Ethics: Inventing Right and Wrong*（1977）において展開した錯誤理論（error theory）を徹底した場合の帰結であると考える（EQ: 152）。しかしそうした徹底化の先にある道徳的言語は指令的，説得的，あるいは賛成や是認を表出するだけの単純な表現へと制限され，道徳的な真偽に関連する思考（事物の正しい把握，誤り，可謬性，訂正といった思考）を表現する余地を消し去ってしまうので是認できないとする（AE: 153–154）。

[2] 道徳的思考の生成における感受性の役割を重視する立場は，必ずしも投影説に至るわけではない。たとえば D. ウィギンズや J. マクダウェルは，道徳的感情が事物の道徳的特徴を生み出すことを否定し，両者を相補的なパートナーであると考えて先項不在説（no-priority view）を主張する（Wiggins 1987，McDowell 1998）。

morals の以下の記述を自身の着想の淵源として挙げている（SW: 171，EQ: 152）。

> 理性は真理と誤謬の知識を伝え，趣味は美醜，悪徳と美徳との感情をもたらす。一方は付加したり削減したりせずに，対象をそれらが実際にあるがままの本来の姿において発見する。他方に産出能力（productive faculty）を有し，内的な感情から借りてきた色彩によって，あらゆる自然的対象に金メッキを塗るか，あるいは汚して（gilding or staining）いわば新たな創作（creation）を行うのである。（Hume 1751/1998，app. 1，para. 21）

先の例に当てはめるならば，「犬を蹴ることは悪い」という道徳的判断を下すことは発見ではなく創作である。私たちは，犬の体毛が白という性質を例示していることを理解するのと同じ仕方で，犬を蹴るという行為が特定の道徳的性質を例示していると理解しているのではない。そうではなく，私たち自身の感受性に従って自然的対象に道徳的特徴を投影しているのである。

2　表出主義

ブラックバーンは，道徳的思考の生成過程についてだけでなく，道徳的言語についても私たちの実践を通じて解明するという姿勢を貫く。彼はウィトゲンシュタインの「ことばは行為（the deed）である」[3] という一節を引用し，私たちが用いる言葉の意味を理解することは，言語的交流と結びついた活動を理解することによって可能であると主張する（RP: 51）。私たちは道徳的言語を通じて，行為や人生の選択について議論したり問うたり反省するといった活動を行う。このような役割を担う道徳的な言語実践は，他の種類の言語実践とは重要な点で異なる特徴を有しており，それは話者の心的状態に言及することによって説明される[4]。ブラックバーンによれば，私たちが特定の行為や性格について熟慮したり他人の判断を変えようと試みたりするとき，「どこかに立ち位置を持たねばならない。そして，その最も確かな立ち位置とは，自らの根本的な関心，言い換えれば，自らの価値と私たちが呼ぶものである。私たちが持つのは，〔認知的な心的状態や概念から成る〕アポロン的基盤ではなく，〔感情・欲求・態度といった非認知的な心的状態から成る〕ディオニュソス的グループの比較的安定的で持続的なメンバーなのである」（RP: 90）。言い換えれば，道徳文を発話する際に私たちは道徳的信念を持っているという認知的な心的状態にあるのではなく，行為や人物に対する肯定的あるいは否定的態度という非認知的な心的状態を表出しているのである。このように道徳的な言語実践の特徴を非認

---

[3] L．Wittgenstein（1953），§ 546．

[4] A．ギバードも同様の説明を与えている（Gibbard 2003，p．63）。

知的な心的状態に帰する立場は「表出主義」と呼ばれる[5]。

表出主義者としてのブラックバーンにあっては，「善い」「正しい」といった道徳語を含む言明〔以下，「道徳的言明」と表記する〕はその見かけに反して命題ではないが，その構造に関して命題と同型対応する「命題的反映」であるとされる。

> 「命題的反映」という言い方によって私が大まかに意味するのは，一見したところさまざまな事態や，それらの事態の間の関係，そしてそれら事態の論理について，事実的な主張をしているように見えるが，実際には態度について主張している言明である。もちろん，だからと言って，この言明に伴う命題は，どれも態度を主題とする命題に分析されるとは限らない。（EQ: 126）

> 道徳的命題は，第一にそれらは何かを表象するものではないものとして理解されるような状態の「命題的反映」である……それは命題構造と必然的な実践的状態の間で同型対応する。（RP: 77）

ここで言われる同型対応が原子文だけではなく，複雑な文や推論にも認められるのだとすれば，表出主義の枠組みからどのような説明を与えられるのか。この課題は，1960 年代にギーチとサールが表出主義の意味論に対して提出した「フレーゲ・ギーチ問題」あるいは「埋め込みの問題（embedding problem）」と重なるものである。ギーチらが指摘しているのは，否定文，条件文の前件，疑問文などに埋め込まれた道徳的判断は明らかに感情や態度の表出を伴っていないので，表出主義による解釈は妥当ではない ── 善い・正しいといった道徳語が持つ役割の把握に失敗しているばかりか，推論規則に依拠した推論すら行うことができない ── ということである。言い換えればフレーゲ・ギーチ問題が大枠として要求しているのは，道徳的判断の表出内容について説明を与えることであり，Woods（2017）の整理では，次の三つの条件を満たす説明でなければならない。すなわち，（1）「盗みは悪い」のような原子文の意味を説明する際に適用されている表出的要素と関連づけられた形で，否定文や条件文の前件に道徳的言明が埋め込まれた文について説明を与えること，（2）（1）の条件を満たすよう分析された文の間の論理的関係を正当化する（legitimate）こと，（3）「盗みは悪くかつ楽しい」のような道徳文と記

[5] 表出主義を支持しながら道徳実在論に与することも可能である。例えば，実在論的表出主義（realist-expressivism）を標榜するコップの立場は，本論文の第 3 節で取り上げるハイブリッド表出主義と道徳的性質に関する自然主義的実在論の両方を支持する（Copp 2001，2009）。彼の実在論的表出主義にあっては，道徳的言明によって表出され，かつ，なんらかの行為をなすための動機となりうる態度は，意味論上は何の役割も果たさず，語用論上でグライス的な「慣習的な含み（conventional implicature）」に対応するものとして理解される。

述文の連言からなる混合文の意味を説明できることが求められる（Woods 2017，pp.228–229）。

ブラックバーンはこの問題に着手した当初，「もし盗みが悪いならば，子どもに盗みをさせるのも悪い」のような条件文を，盗みに対する否認の態度が子どもに盗みをさせることに対する否認の態度を伴う（involve）ということを記述している文として分析した（EQ: 127）。つまり，条件文を二つの態度の関係を記述する文として分析した。しかし，この応答の仕方では，原子文が態度を表出する文として理解される一方で，条件文は態度に関する記述文として理解されることになるため，道徳的言明の理解に関して揺らぎが生じてしまっている。このような批判を受け，*Spreading the Words* では，条件文を態度間の関係の記述ではなく態度間の関係に対する高階の態度の表出と分析するよう見解を改訂している。この見解に基づくならば，「もし盗みが悪いならば，子どもに盗みをさせるのも悪い」のような条件文は，「盗みをすることに対する否認の態度に伴って子どもに盗みをさせることに対する否認の態度が生じること」に対する是認の態度を表出していると理解される。

このような仕方で条件文を高階の態度を表出している文と解釈するならば，モードゥス・ポネンスを構成するすべての文を表出文として考えることができる。モードゥス・ポネンスの前提となる原子文と条件文を是認しながら結論を是認しない人は，自分が持つ態度間に衝突が生じており，「破れた感受性（fractured sensibility）」を持っているとされる[6]。破れた感受性は道徳的言明の評価という実践的目的の達成の妨げになるため，それ自体是認の対象とはなりえないのだ（SW: 193–195）[7]。しかしこの応答に対しても，態度間の整合性という観点から論理の規範性を説明する場合，道徳的不整合と論理的不整合を識別できていないとの批判が加えられている（Wright 1988，Schueler 1988，Hale 1993，van Roojen 1996）。ヴァン・ルージェンによれば，私たちが論理的不整合と考えるものと，表出主義が提示する態度の不整合は，外延について一致しないため，高階の態度に基づく説明は失敗しているのである（van Roojen 1996，p.329–333）。

3　ハイブリッド表出主義

上記の問題を補うものとして，ハイブリッド表出主義（hybrid expressivism）が近年注目を集めている。いくつかのバリエーションはあれどその基本的なテーゼは次のようなものだ。

---

[6] ここでいう条件文とは「もし A ならば B」という形をした日本語の文のことであり，ここでの「ならば」は実質含意と同様の振る舞いをする結合子として解釈できるものと前提されている。

[7] モードゥス・ポネンスを構成する文の間の衝突を避ける理由を説明するためには，破れた感受性に対する私たちの否認を挙げるだけでは不十分であるという批判もある。というのも私たちは破れた感受性を常に否認するとは限らないからである（Woods 2017，p.233）。

1．道徳的発話は何らかの仕方で（a）記述的要素と（b）表出的要素の双方から構成される。
2．命題の論理規則は上記の（a）記述的要素の真理値適合性（truth aptness）に基づいて説明される。

M．リッジに代表されるハイブリッド表出主義者は，（a）記述的要素が持つ真理値適合性に訴えてフレーゲ＝ギーチ問題をかわせると考えている。それでは，われわれは直ちにブラックバーンの表出主義（「純粋な表出主義」）を放棄し，ハイブリッド表出主義を採用すべきなのか。以下では，ハイブリッド表出主義の概観と純粋な表出主義との比較を通じて検討する。

それでは，リッジのハイブリッド表出主義を特徴づける第一のポイントである道徳的発話の表出内容に関する彼の主張を見てみよう。リッジによれば，道徳的発話は話者の態度と信念の両方を表出し，それぞれ次の条件を満たすとされる（Ridge 2007，p.56）。

（1）行為が特定の性質を有する限りでのその行為に対する適切な是認の状態
（2）その性質への照応的指示（anaphoric reference）を適切なものとする信念（その行為はその性質を有するという信念）

そして上記の定式を発展させ，より複雑な理想的助言者（Ideal Advisor）型のハイブリッド表出主義を展開する。この発展されたバージョンでは，道徳的発話は以下の二つの心的状態を表出しているとされる（*Ibid.* p.57）。

（1）行為が特定の助言者に是認される限りでのその行為に対する適切な是認の状態
（2）そのような助言者への照応的指示を適切なものとする信念

リッジが措定する助言者は，関連する事実について十分な情報と判断能力を備えた理想的に合理的な存在者ではなく，行為者が実際に持っている欲求や道徳的態度によってこの助言者の特徴が定まるとされる。たとえば，義務論を支持する人が「慈善活動はよい」と発話している場面を想像しよう。リッジの理想的助言者型のハイブリッド表出主義によれば，その人は，（1）義務論を支持する理想的助言者に是認される限りでの，慈善事業に対する適切な是認の態度と，（2）義務論を採用する理想的助言者は慈善活動を是認するだろうという信念の両方を表出しているのである。この点においてリッジは自身の見解を「融和的（ecumenical）」とし，道徳的発話の表出内容を話者の態度に限定するブラックバーンと袂を分かつのである。

とはいえ，ブラックバーンも道徳的判断が下されるプロセスが態度や感受性に尽きるものと考えていたわけではなく，道徳的発話と信念の間に何らかの付随関係があることを認めている。

さまざまな道徳的な主張が自然的な主張に付随する（supervene）ことは，概念的な事柄であるように見える。そのことが認識できない，あるいはその制約に従えない人というのは，実際，道徳的実践における能力（competence）を構成する何かを欠いているということになるだろう。そして，このことには充分な理由がある。つまり，付随性を認識できないということは，我々が何かを道徳的に語る際の目的全体（すなわち，事物をその自然的性質に基づいて選び，賞賛し，順位づけ，承認し，禁止するという目的）に背くことになるだろう，という理由である。（EQ: 137）

ここで言われているのは，自然的主張と道徳的主張の付随関係を認識することが，道徳的な語りを適切にするための条件として要請されているということである。ある道徳的発話に付随するものとして引き合いに出される自然的主張（表象的信念）は必ずしも人々の間で合致しない。たとえば，「工場畜産は不正である」という道徳的発話について，「工場畜産によってもたらされる害の総計が利益の総計を上回っている（ので工場畜産は功利原理に反する）」という信念が付随することを認める者もいれば，他方では「工場畜産は有徳と思われる人物によって非難されている」という信念が付随することを挙げる者もいるだろう。つまり，ハイブリッド表出主義の枠組みにおいて，道徳的発話によって態度と共に表出されている信念にあたるものを，道徳的発話の内容を方向付けるという役割を担うものとしてブラックバーンもまた認めているのである。ただし，比較の射程を道徳的発話の表出内容に限定するならば，依然として両者の違いは残る。

リッジ流のハイブリッド表出主義を特徴づける第二のポイントは，彼の意味論を基礎付ける見解，すなわちメタ意味論にある。メタ意味論は特定の意味論の成立に欠かせない事実の基礎付けを担う領域を扱う。この領域で扱われる課題は，言語表現の意味内容がどのようにして確定するのかを解明することと，特定の語によって表現されている思考が特定の意味内容を持つ理由を解明することであるとされる（L. Schroeter and F. Schroeter 2017, p.521）[8]。換言すれば，

---

[8] Schroeter らはこの課題を「意味能力（semantic competence）」と「意味の確定（semantic determination）」と名付け，それぞれを以下のような問いの形で定式化している。

（1）意味能力：何によって「ある人は語の意味を習得している（competent）」と判定されるのか。
（2）意味の確定：何によって適格な（competent）語の使用は特定の意味論的性質を持つのか。

これらの課題への応答は，意味能力および意味内容の決定要因と主体の関係をどう捉えるかによって，内在主義と外在主義に分類される。内在主義によれば，主体は自身の語や思考の意味内容について明示的に知っている（あるいはアプリオリなアクセスを有している）という前提に基づき，意味能力と意味内容はもっぱら主体が利用できる個人的・心理的リソース内部の物理的要因によって決

メタ意味論は，道徳的言明がどのようにしてそれぞれの意味論的立場が想定するような内容を持つのかを明らかにするという役割を担う。従来，表出主義は意味論上の立場であるという見解が広く共有されていたが，近年，表出主義は意味論の領域に尽くされるという主張に懐疑的な論者たちによって，この立場がメタ意味論にも属するという理解に基づいた，表出主義の再構築が盛んになされている（Charlow 2014，Chrisman 2015，Ridge 2014）[9]。

純粋な表出主義のメタ意味論上のテーゼは，「文の意味論的値として〔是認・否認といった態度と結びついた〕非表象的な関数[10] とともに，表象的な内容が割り当てられることを除外する。」というものである。さらにこのテーゼから「道徳的言明の内容として命題自体が割り当てられることはない。」というテーゼが導かれる（Charlow 2014，pp.2–3）。

他方，ハイブリッド表出主義のメタ意味論上のテーゼとして，リッジは，「規範的主張がどのような意味を持つかは，その規範的主張がなす規範的判断の表出によって定まる」という主張を支持する（Ridge 2014，p.107）。そしてこのテーゼは，一階の意味論として真理条件的意味論を採用することを妨げないので（*Ibid*., p.136），ハイブリッド表出主義は複雑な道徳的発話の意味を真理条件的意味論に基づいて説明できるのである。

ブラックバーンのような純粋な表出主義者とリッジのようなハイブリッド表出主義者はどちらも，道徳的発話が非認知的な態度を表出していることを認め，その非認知的な態度は，当該の道徳的発話で用いられている道徳語の適用範囲を確定するような信念によって構成されると考える点で見解を共有している。その一方で，各々のメタ意味論上の主張まで考察の射程を広げるならば，純粋な表出主義が徹底して道徳文の意味内容を非表象的な要素に限定するのに対して，ハイブリッド表出主義はそうした限定をしないという違いが浮き彫りとなる。

リッジ流のハイブリッド表出主義を特徴づける第三のポイントは，道徳的言明の真理値適合性を支持する主張にある。“The Truth in Ecumenical Expressivism”において，彼は「要求されている（required）」という語を例にあげ，「『行為 X が要求されている』という道徳的言明が真であるのは，X がある種の適切な助言者によって主張されるであろう場合だ」と論じている。もし，複数の人が「慈善活動はよい」という同じ発話をしている場合でも，片方が功利主義を支持する助言者を胸に抱き，他方は義務論を支持する助言者を念頭に置いているのであれば，両者の一致は「態度の一致（agreement in attitude）」であって，信念の一致ではない（Ridge 2009，

定されると主張する。他方，外在主義は，意味能力と意味内容の決定要因は主体が利用できる個人的・心理的リソースに尽きないと考え，主体の表象的状態と主体をとりまく環境内にある特定の対象や性質などを結びつける因果–歴史的な関係（causal-historical relation）あるいは指示対象が持つ形而上学的性質によって決定されるとする（Schroeter and Schroeter 2017）。

[9] 表出主義はあくまで意味論上の立場だと考える表出主義者もいる（Schroeder 2008）。

[10] 非表象的関数に該当するものとして，ブラックバーンは態度オペレーターを導入している（EQ: 194）。

p.236)。ここで言及されている「ある種の適切な助言者」を，リッジが道徳的発話の表出内容の定式に組み込んだ「(理想的) 助言者」と重なるものとして解釈するならば，ある道徳的言明の真理条件は，その発話が表出する信念が真である条件ということになろう。

ここまでリッジのハイブリッド表出主義の特色を概観した。ブラックバーンの心理的意味論を引き継ぎつつ認知主義との融和を目指して展開されたハイブリッド表出主義について，リッジ自身は主に三つの利点を挙げている。

第一の利点として，リッジのハイブリッド表出主義は，道徳的述語について，主張がなされている文と埋め込まれた文の両方に関して，統一的な意味論を提供できるのでフレーゲ・ギーチ問題に応答できる。前述のように，この立場の第一の特徴は，道徳的言明の表出内容として話者の態度と信念の両方を措定することであった。そして第二の特徴である彼のメタ意味論上の主張は一階の真理条件的意味論と両立することが示唆されていた。リッジは，「規範的判断にかかる論理的複雑さを表象的な信念の内容に『押し付ける (offloading)』」ことでフレーゲ・ギーチ問題を解消できるとする (Ridge 2014，5.3)。すなわち，道徳的発話が表出する信念の内容は，それが主張されている文であっても埋め込まれた文であっても，真理条件的意味論に基づく合成性に関する説明によって包括的に説明できるのである。

ハイブリッド表出主義の第二の利点は，アクラシアの可能性を認めることができることである。アクラシアとは，「行為者 S が行為 X をすべきであると判断しかつ自分は X できると知っていながら，X をすることに (あるいは X をする意図をもつことにさえ) 至らない」という状態である。リッジによれば，ハイブリッド表出主義はこのようなアクラシアが含む道徳的判断と動機づけ間の不整合を，道徳的発話が表出する態度と信念の齟齬として理解できる (Ridge 2007，pp.67-68)。

第三に，ハイブリッド表出主義は純粋な表出主義の枠組みでは識別できないとされる二つの要素，判断者の確信 (certitude) の程度と対象の重要性 (importance) を区別できるという利点がある。前述のアクラシアの可能性と同様に，区別されるべき各要素に道徳的発話が表出する態度と信念を割り当てるという方策をリッジは採用する (*Ibid*., pp.70-74)。他方，道徳的言明の意味をそれが表出する態度によって一元的に説明しようとする純粋な表出主義にあっては，道徳的判断に対して話者が付す確信と重要性はどちらも表出されている態度の強度という一つの尺度として捉えざるをえない。したがって，純粋な表出主義が両者の混同を避けるには，道徳的言明の意味という観点から独立した説明を与えることができなければならない。

以上で確認したように，ハイブリッド表出主義の代表者であるリッジによれば，フレーゲ・ギーチ問題，アクラシアの可能性，判断者の確信と重要性の区別を適切に扱うことができるという点で，彼の立場は純粋な表出主義に対して優位を保っている。

それでは，準実在論者も，道徳的言明についての意味論として，純粋な表出主義ではなくハイブリッド表出主義を採用すべきなのか。この問いに対して，私は主に二つの理由から準実在

論者はハイブリッド表出主義に転向するべきではないと応答したい。一つ目の理由は，ブラックバーンの言語哲学の理論内部での整合性に関わり（内在的理由），二つ目は，ハイブリッド表出主義が純粋な表出主義の利点を保持しながら批判を乗り越えているという主張に関わる（外在的理由）。第 4 節で第一の内在的理由を，第 5 節で第二の外在的理由を提示する。

4　準実在論はハイブリッド表出主義を採用すべきではない：内在的理由

第一の内在的理由は，仮に真理条件的意味論の保持を強みとするハイブリッド表出主義を採用した場合，ブラックバーン自身は真理条件的意味論に対する多様な批判を展開していることから（SW chap. 7），彼の理論内部で衝突が生じることになるというものである。ブラックバーンが展開した批判に目を向ける前に真理条件的意味論の内容について確認する。

真理条件的意味論は，言語の意味の解明にあたって真理概念を中心に据える立場である。この見解に与するのであれば，文の意味を知っているということは，その文が真となる条件を知っているということである。つまり，二つの文が同義であるのは，二つの文がまったく同一の条件のもとで真であるときである。

純粋な表出主義を採用するブラックバーンにあっては，道徳的言明の意味は非認知的な心的状態によって理解され，投影説に基づいて「道徳的コミットメントはあたかも真正な真理条件を持つ判断であるかのように扱われる」にすぎない（SW: 216）。また，「道徳的考察や価値づけは独特の活動なのだから，私たちが道徳や価値を伝える際に用いる言葉が独特の意味を持つことは最初から明らかだった」とし，「なぜやみくもにこれらの言葉〔道徳的言明〕の「真理条件」を解明するという不可能事に挑もうとするのか」と，真理条件的意味論に依拠する立場に疑念を呈する（RP: 87）。したがって，少なくとも道徳の領域において，彼が真理条件の把握の可能性に懐疑的である点を鑑みるならば，文の意味を真理条件に帰する真理条件意味論を採用することはできないだろう。

また，特にデイヴィッドソンが展開した真理条件的意味論をブラックバーンが批判している点も，準実在論がハイブリッド表出主義を取り込むことを止まらせる理由になるだろう。彼の批判は，デイヴィドソンが措定する真理の定義と，真理条件的意味論によって私たちの言語実践に課される制限の内容に向けられている[11]。後者の論点はダメットが展開した批判と概ね重なる。順番に見ていこう。

第一の批判は，デイヴィドッソンが提示する真理の定義に関わる。デイヴィドソン流の真理

[11] リッジもまた，デイヴィッドソンの真理条件的意味論について，意味の公理の逸脱特性を除外できていない点を問題視している（Ridge 2014, p.136）。しかし彼は可能性世界意味論やモデル論的意味論といった，真理概念に依拠したその他のスタンダードな意味論を支持してはいない。

の定義では，互いに同義ではないがたまたま等しい外延をもつ表現（つまり，まったく同じ範囲の指示対象に当てはまる表現）を区別することが困難になる（SW: 288）。

第二の批判は，デイヴィドソンの想定に反して，文を合成する語の真理規則を特定できないケースが多々あるというものである。「かつ」のような真理関数的な結合子の場合，この語が文を合成する際の真理規則を述べるのは容易である。ところが，「ゆえに（and then）」や「と信じている」という語を含む真理関数的でない構文を彼の枠組みで扱うためには，少なくとも「隠れた論理形式への過剰なコミットメント」が要請される（SW: 289）。

第三の批判は，真理条件的意味論の要求内容が私たちの言語習得にかかわる実践と乖離しているというものである。たとえば，幼児は「雪」「白い」といった様々な表現をどの状況で適用するのかということを，すでに当該の表現を習得している人の実践を観察したり，自分が行う適用に対して修正を受けることを通じて学ぶ。このような過程を通じて学ぶのはあくまで言語表現の適用に関する傾向性の集合（a set of dispositions）であって，真理条件ではない。したがって，主張文の意味を真理条件によって規定する真理条件的意味論にあっては，この種の傾向性の集合を理解しているだけでは，意味の理解は達成されていないことになってしまう。さらには，真理条件的意味論も支持するならば，真理条件を確定できない表現は無意味であるという帰結が導かれるという点でもこの立場は問題含みである（Dummett 1975）。

以上のように，ブラックバーンは真理条件的意味論に対して多角的な批判を展開している。真理条件的意味論に立脚したハイブリッド表出主義に与することは自身の純粋な表出主義と不整合をきたすことになるため，彼にとって採用すべき道筋ではないだろう。

5　準実在論はハイブリッド表出主義を採用すべきではない：外在的理由

準実在論者がハイブリッド表出主義を採用すべきではない理由は，前節で検討したようなブラックバーンの理論内部の整合性に関わるものだけではない。本節では，ハイブリッド表出主義そのものに対して複数の批判が提示されている点に着目する。いずれの批判も道徳的言明が表出している要素として信念を帰属する点に向けられている。

第一の批判は，道徳的な態度の帰属には主観的な基盤を持つ信念だけでなく必ず特定の非認知的な態度の帰属が伴う，というハイブリッド表出主義の前提に対するものである。シュレーダーはこの前提を「大きな仮説（Big Hypothesis）」と呼び，この仮説を支持する十分な証拠をハイブリッド主義は提供できていないと指摘する（Schroeder 2009, p.301）。また，「大きな仮説」が正しいことは道徳的判断の動機づけに関する内在主義を説明するための必要条件であるため，その正当性に対する疑念を払拭できなければ，ハイブリッド表出主義の利点が大きく損なわれるという難点もある（*Ibid*., p.303）。このように，「大きな仮説」に対する応答の成否はハイブリッド表出主義が魅力ある立場であるかを決する重要なポイントであるが，仮にこの仮説

が正しいとしても次のような問題含みの帰結が導かれる。すなわち，「大きな仮説」に依拠するならば，複数の話者による道徳的発話が表出する信念に関して一致していながら，なお態度に関して相違が残るという状況は生じえないことになる。しかし，複数の人が同じ内容の信念を持ちながら異なる態度を持つという状況が生じる余地は残されているだろう。

第二の批判は，複数の人々が同じ道徳的主張をしていながらその主張が表出している信念について不一致をきたしているケースに関して，ハイブリッド表出主義はこの種の不一致の位置付けを解明できていないというものである（Toppinen 2013）。リッジによれば，ある道徳的言明が真であるかどうかは，その言明が表出する信念が真であるかどうかに依存している。しかし，「慈善事業はよい」と複数の人が同じく発話をしている場合でも，表出している信念の内容（話者の胸中にいる理想的な助言者）によって発話の意味や真理条件が異なるというのは，道徳的言明の意味そのものは話者相対的ではないという想定と齟齬をきたす。このようなハイブリッド表出主義に対する批判は，準実在論者にとって，純粋な表出主義の放棄を踏みとどまらせる理由を構成するだろう。

したがって，ブラックバーンの理論内部の整合性を保つという点と，ハイブリッド表出主義自体が抱える難点から，準実在論者がフレーゲ・ギーチ問題の解決を目的として，自らの表出主義をハイブリッド表出主義に置き換えるという方策は，即座に受け入れられるものではない。

結　論

本稿では，ブラックバーンの純粋な表出主義と近年注目を集めているハイブリッド表出主義の相違点を確認し，後者が前者の難点を排する代替案として登場したものでありながら，なおブラックバーンの準実在論にあっては，後者のハイブリッド表出主義に取って代わられるべきではない理由を提示した。リッジが提出したハイブリッド表出主義を比較対象とした場合，道徳的発話の表出内容，自身の意味論の前提をなす主張，そして道徳的言明の真理値適合性について両者は見解を異にする。リッジは，私たちが特定の道徳的判断に対して付す確信と重要性の区別やアクラシアといった道徳的言語実践に関わる諸現象について適切な説明を与えられる点を自身の強みであると主張した。しかし，このような利点をもってしても，ハイブリッド表出主義に転向することを踏みとどまらせる理由を，ブラックバーンの理論内部の整合性を確保するという内在的理由と，ハイブリッド表出主義自体が抱える難点が残されているという外在的理由に分けて提示した。とはいえ，本稿の内容は，純粋な表出主義がハイブリッド表出主義よりも優位にあることを決定づけるものではない。どちらの立場が私たちの道徳的言語実践に関する包括的かつ適切な説明を与えられるのかを決するには，両者が抱える難点への応答や，それぞれの立場が依拠する前提の正当化といった課題へのさらなる取り組みが必要である。

（こばやし　ちえ・思想文化学専攻）

参考文献一覧

Blackburn, S., 1984,［SW］*Spreading the Word*, Clarendon Press.

――., 1993,［EQ］*Essays in Quasi-Realism*, Oxford University Press.

――., 1998,［RP］*Ruling Passions*, Oxford University Press.

――., 2006,［AE］"Antirealist Expressivism and Quasi-Realism," in D. Copp（ed.）: *The Oxford Handbook of Ethical Theory*, Oxford University Press, pp. 148–162.

Charlow, N., 2014, "The Problem with the Frege-Geach Problem," in *Philosophical Studies*, 167（3）, pp. 635–665.

Chrisman, M., 2015, *The Meaning of "Ought": Beyond Descriptivism and Expressivism in Metaethics*, Oxford University Press.

Copp, D., 2001, "Realist-Expressivism: A Neglected Option for Moral Realism," *Social Philosophy and Policy*, 18（2）, pp. 1–43.

――., 2009, "Realist-Expressivism and Conventional Implicature," in R. Shafer-Landau（ed.）, *Oxford Studies in Metaethics*, Vol. 4, Oxford University Press.

Davidson, D., 1967, "Truth and Meaning," in his *Inquiries into Truth and Interpretation*, Clarendon Press, pp.17–36.（D. デイヴィドソン『真理と解釈』, 野本和幸・金子洋之・植木哲也・高橋要訳, 勁草書房, 1991.）

Dummett, M., 1975, "What is a Theory of Meaning?," in his *The Sea of Language*, Oxford University Press, pp. 1–33.

Geach, P., 1965, "Assertion," *Philosophical Review*, 74（4）, pp. 449–465.

Gibbard, A., 2003, *Thinking How to Live*, Harvard University Press.

Hale, B., 1993, "Can There Be a Logic of Attitudes?," in C. Wright and J. Haldane（eds.）: *Reality, Representation, and Projection*, Oxford University Press, pp. 337–363.

Hume, D., 1998, *An Enquiry Concerning The Principles of Morals*, Oxford University Press.（D. ヒューム『道徳原理の研究』渡部峻明訳, 哲書房, 1993.）

McDowell, J., 1998, *Mind, Value, and Reality*, Harvard University Press.

Mackie, J. L., 1977, *Ethics; Inventing Right and Wrong*, Penguin Books.（J. L. マッキー『倫理学 ── 道徳を創造する』加藤尚武監訳, 哲書房, 1990.）

Ridge, M., 2007, "Ecumenical Expressivism: The Best of Both Worlds," in R. Shafer-Landau（ed.）: *Oxford Studies in Metaethics*, Vol. 2, Oxford University Press, pp. 51–76.

――., 2009, "The Truth in Ecumenical Expressivism," in D. Sobel and S. Wall（eds.）: *Reasons for Action*, Cambridge University Press, pp. 219–242.

――., 2014, *Impassioned Belief*, Oxford University Press.

Schroeder, M., 2008, *Being For: Evaluating the Semantic Program of Expressivism*, Oxford University Press.

――., 2009, "Hybrid Expressivism: Virtues and Vices," *Ethics*, 119（2）, pp. 257–309.

――., 2010, *Noncognitivism in Ethics*, Routledge.

Schroeter, L., and Schroeter, F., 2017, "Metasemantics and Metaethics," in T. Mcpherson and D. Plunkett（eds.）: *The Routledge Handbook of Metaethics*, Routledge, pp. 519–535.

Schueler, G. F., 1988, "Modus Ponens and Moral Realism," *Ethics*, 98, pp. 492–500.

Searle, J., 1962, "Meaning and Speech Acts," *Philosophical Review*, 71（4）, pp. 423–432.

Toppinen, T., 2013, “Believing in Expressivism,” in R. Shafer-Landau (ed.): *Oxford Studies in Metaethics*, Vol. 8, Oxford University Press.

van Roojen, M., 1996, “Expressivism and Irrationality,” *Philosophical Review*, 105, pp. 311-335.

Wiggins, D., 1987, *Needs, Values, Truth: Essays in the Philosophy of Value*, Blackwell.

Wittgenstein, L., 1953, *Philosophical Investigations*, Blackwell.（L. ウィトゲンシュタイン『ウィトゲンシュタイン全集 8　哲学探究』，藤本隆志訳，大修館書店，1976.）

Woods, J., 2017, “The Frege-Geach Problem,” in T. Mcpherson and D. Plunkett (eds.): *The Routledge Handbook of Metaethics*, Routledge, pp. 226-242.

Wright, C., 1988, “Realism, Antirealism, Irrealism, Quasi-realism,” *Midwest Studies in Philosophy*, 12(1), pp. 25-49.

［謝辞］本研究は，JSPS 科研費 JP19J11551 の助成を受けたものである。